キリストの手紙として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 司郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24627

「キリストの手紙として」

大学宗教主任　佐藤司郎

コリントの信徒への手紙二、第三章三節

3あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。

昨年私の読んだ本の中でもっとも印象に残っているものの一つが、オーティス・ケーリの『日本プロテスタント宣教史――最初の50年（1859－1909年）』です。ケーリはご承知のように、新島襄の友人であり、アメリカンボードの宣教師として、同志社をはじめとして、すぐれた足跡を残した宣教師です。この本は、日本伝道の最初の五〇年間を、宣教師の側から書いた貴重な記録であり、まさに名著ですが、不思議に訳されてこなかったものです。昨年、改革派教会の篤学の士の、丁寧、かつ誠実な翻訳によって、読めるようになりました。

この本を読むと、日本に来た多くの宣教師が、じつに熱心に教育に取り組んだことが分かります。宣教師来日後も禁教がつづいていたこと、また開教後も、教会を建て直接伝道をおこなうにはまだ

相当の困難があったことなども、そうした教育との取り組みをうながした要因ですが、それだけではなくて、むしろ教育をとおしての伝道という積極的な宣教活動が試みられたと考えてよいと思います。礼拝がささげられ、聖書を教える課目がそこに必ずもうけられていました。やがてミッション・スクールの多くが外国ミッション団体の手を離れ、自立していきますが、キリスト教学校が福音の宣教、伝道という大きな志のもとにはじまり、それが日本人に受けつがれて今日にいたっているということ、このことは、教会はもちろんのこと、何より私たち学校関係者が、忘れてならない、つねに肝に銘じておくべきことです。

*

こうしたことを考えながら思い起こした聖句が、思い起こしたというより、与えられたといったほうがよいと思いますが、それが、いまお読みしたコリントの信徒への手紙Ⅱの一節です。

あなたがたは、キリストがわたしたちを用いてお書きになった手紙として公にされています。墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に、書きつけられた手紙です。

冒頭の「あなたがた」というのは、言うまでもなく、この手紙の受け取り手である、コリント教会の人びとです。ですからパウロは、ここで、コリント教会を、あるいはその枝である人びとを、

キリストの手紙と呼んでいるわけです。まさに一つの手紙の中で、手紙という、まことに卓抜な、はっとするような比喩を用いて、コリント教会の人びとに、自分たちが何者であるか、さとらしめています。さきほどケーリの本に関連して、教育をとおしての伝道と申しましたが、キリストの手紙という教会の理解はひとりコリント教会、少し広げて一般に教会だけでなく、キリスト教学校にも、基本的に適用して差し支えないものだと思っています。私たちも、われわれは、キリストの手紙だと、自分たちを理解していい、理解しなければならないということです。

ご承知のように、コリントの教会は、決して模範的な、問題のない教会ではありませんでした。むしろ多くの問題をかかえ、パウロのあとに教会に入り込んできた、この手紙の後のほうで「偽使徒」というような言葉も使っていますけれども、そのような者たちに動かされて、パウロの使徒性を疑いはじめるなど、人間的に考えれば、教会と呼べないような状況にあったのです。しかしそのようなコリントの教会が教会であることをパウロは少しも疑いませんでした。教会をたんなる人間の集まり、人間の組織だとは、考えていなかったからです。

教会がキリストの手紙と呼ばれたとき、何よりも強調されてよいのは、これは、キリストが書いた、キリストが差し出した手紙であるということです。パウロは、「私たちを用いてお書きになった」と書いていますが、それは作者はキリストだと、自分ではない、人間の手紙ではない、生ける神の霊による手紙だと言っているのです。どんなに多くの問題をかかえていようが、この手紙、す

なわち、コリントの教会は、神に基づくとパウロは語っています。

さて手紙というのは一つの比喩です。この比喩で考えれば、それならどこへ宛てられているのかと問うてもよいことです。それは、ここには直接語られていません。しかしこの世へであることは間違いないことです。「公にされている」というのは、この世に宛ててという意味ととってもよいと思います。隠れようもなく、教会も、キリスト教学校も、この世にあって、この世に知られており、二節の言葉を使えば、いわば「読まれている」のです。聖書をこの世は読むわけではない。そうではなくて、この世は、教会という、あるいはキリスト教学校という手紙を読むのです。そこに神を読みとっていると、いうことはできるのです。

*

手紙の比喩を手がかりに少し申し上げてみましたが、その線で、もう一つ、問いを立てることが許されます。それは、その手紙はどういう手紙か、あるいは何がそこに記されているのか、ということです。教会とは何であるのか、キリスト教学校は何であるのか、私たちはこの世にあって何者なのか、それを知るためには、われわれはそれも問う必要があります。

その手がかりになるのは、「墨ではなく生ける神の霊によって、石の板ではなく人の心の板に書きつけられた手紙」というくだり、とくにこの後半の、「石の板ではなく人の心の板に書きつけられた手紙」という言葉です。

詳しい説明は不要だと思いますので、結論だけ、申します。そこには、律法ではなく福音が書き記されている、つまりキリストの手紙には、キリスト・イエスその方のことが記されているということです。

説教学者R・ボーレンが、来日講演で語ったことを思い起こすのですが、彼は説教を手紙になぞらえながら――テサロニケの信徒への手紙Ⅱに説教と手紙を並列して語っているところがあります――こう言っています、「愛の手紙は、業務上の手紙とは違ったスタイルで書かれます。おそらくわれわれの説教は、燃えるような愛の手紙であるよりも、あまりにも業務上の手紙に似ているのである」。「業務上の手紙」のような説教というのはまさにドイツの教会の説教の一面をついた言葉だと思いますが、それはともかく、キリストの手紙が業務上の手紙ということは、まさかないでしょう。教会だけでなく、キリスト教学校のわれわれの仕事が、業務としてなされているなら不幸です。キリストの手紙は、愛の手紙であり福音の手紙です。

この福音を、いまもし律法と対比させて説明するなら、「人の心の板」に書きつけられたという言葉、エレミヤ書三一・三三をただちに思い起こさせる言葉が、重要です。律法は目をもっているといった人があります（バルト）が、律法、すなわち、神の掟は、外側からわれわれのところに来る権威であって、律法と私たちのあいだの溝、その乖離は、ちょうどカントの義務論がそうであるように、永遠にうめることができません。律法がしかし、「心の中に」置かれているなら、私たち

がそれに従うことこそ、私たちの自由の行為になるはずです。心に記された律法は、私たちに、神は私たちを愛している、つねに私たちの味方だと語っています。それを私たちが受けとめたとき、そしてそれを受けとめつつ神を愛しかえし、隣人を愛するとき、それは神を愛さなければならない、隣人を愛さなければならないこととはならず、私たちは神を愛することが許されている、隣人を愛し、隣人と共に生きることが許されている、というようになるのではないでしょうか。

それが、福音的生活です。福音と、そこから押し出されてなされる福音的な生活、それがキリストの手紙に書き記されていることです。福音を語り、福音的生活が、学校の内外でなされるなら、そのこと自体において、私たちはキリストの手紙であるのです。またそのような福音的な精神が、ゆるぐことなく、私たちの大学をつらぬいているなら、またそれを保持する志が熱く燃えているなら、私たちのふだんの営みそのものが、たとえどんなにつたないものであったとしても、キリストの手紙として世にありつづけることができるのです。またそのように信じて共に歩みたいものです。

（二〇一一・一・一四）